

Construction of Discrete Series for Vector Bundles  
Over Semisimple Symmetric Spaces

東大理学部 小林 俊行 (Toshiyuki Kobayashi)

Abstract  $G/H$  を半單純対称空間とする。Flansted-Jensen, 大島-松木の結果の一般化として、rank condition が成り立つ時、 $H$  の unitary な有限次元表現に相伴した vector 束の  $L^2$  切片に  $G$  の既約加群 (discrete series) を構成する。これらの discrete series は、Zuckerman の定義した derived functor module を用いて表示され、系として、後者の unitarizability が従う。対称空間の（普通の意味の）discrete series の場合と異なり、この parameter は必ずしも canonical Weyl chamber に属さない事が、古典型の例 ( $G = Sp(p, q)$ ,  $U(p, q)$ ) でみられる。

§ 1 序

$G$ : 連結線型半單純 Lie 群

$G_{\mathbb{C}}$ :  $G$  の複素化

$\sigma$ :  $G$  の involutive automorphism.

$H := (G^\sigma)_\sigma$ :  $\sigma$  の固定部分群の連結成分

$G/H$  は半単純対称空間と呼ばれる。

$G/H$  には、 $G$ -不变測度  $d(gH)$  が存在する。

$(\tau, V)$  を  $H$  の unitary な既約有限次元表現とする。

$L^2(G/H, \tau) := \{f: G \rightarrow V : f(gH) = \tau(h)^{-1} f(g), \int_{G/H} \|f(gH)\|_V^2 d(gH) < \infty\}$

とおけば、左正則表現  $G \rightarrow L^2(G/H, \tau)$  は unitary 表現となる。

$L^2(G/H, \tau)$  に実現された既約  $(g, K)$ -module を discrete series

と呼ぼう。(尚、便宜上、既約表現の有限直和に対する discrete series と呼ぶ。)

問題A  $G \rightarrow L^2(G/H, \tau)$  の既約分解を求めよ。

これは、 $\tau = \mathbb{1}$  (trivial 表現) の時でも、 $G/H$  が群多様体或いは複素/実形 或いは rank 1 の場合等にしか解かれていない。(しかし、いずれにせよ、次の問題が main step になると考えられる。 $\tau = \mathbb{1}$  の時は、大島-松木が完全に解決した。)

問題B  $G \rightarrow L^2(G/H, \tau)$  に discrete series が存在するのはいつか? 存在するならそれを決定せよ。

本稿では、更に弱く、次の問題を扱う。

問題 C 適当な条件の下に、 $G \rightarrow L^2(G/H, \tau)$  の discrete series を構成せよ。

discrete series が、 $\tau$  の  $t \in \widehat{H}$  に対する  $L^2(G/H, \tau)$  に実現されていながら explicit に書かない時は、 $G/H$  上の  $G$  共変な主束（構造群は compact 群又は abel 群） $G/H_n$  ( $H \triangleright H_n$ ) 上の  $L^2$  関数に対し、問題 A, B, C を考えた方が自然である。§3 では、この立場で例を扱う。（即ち、射影空間ではないある reductive space の discrete series を扱う事になる）。

問題 C は、Schlichtkrull [1982] が最初に扱った。本稿では、彼の方法では得られない discrete series を含む形で得られる構成として §2 の Theorem を述べる。

古典型の場合、 $G = U(p, q; F)$ ,  $H = U(m; F) \times U(p-m, q; F)$  ( $p \geq 2m$ ) ( $F = \mathbb{R}, \mathbb{C}, \mathbb{H}$ ) の例が我々の対象となる。

この場合の discrete series は、関連する Zuckerman's derived functor module (ZDF module) の vanishing theorem, nonvanishing のための必要十分条件、(適当な条件の下での) 既約性の結果と共に、Theorem A, B, C で述べられる。

## § 2 Discrete Series の構成

§ 1 の notation を用いる。更にいくつかの notation を導入しよう。

$\theta$ :  $\sigma$  と可換な  $G$  の Cartan involution

$$K := G^\theta$$

$H^r (\equiv K^d)$  :  $H$  の複素化の compact real form.

$G^r (\equiv G^d)$  :  $H^r$  を maximal compact subgroup とする  $G_C$  の real form.

$$K^r (\equiv H^d) := (K_C \cap G^r).$$

$H$  が次の形に分解されているとする：

$$(1) \quad H = H_C \cdot H_m; \quad \begin{cases} H_C, H_m \text{ は } H \text{ の連結な正規部分群}, H_C \subset K, \\ H_C \cap H_m \text{ は有限集合。} \end{cases}$$

$H_C = \{e\}$ ,  $H_m = H$  なら (1) は自明で、この時も定理 1 は成り立つ。我々の興味があるのは  $H_C \neq \{e\}$  の場合である。実際、 $H$  が nontrivial な unitary 有限次元表現を持つのは、(1) で  $H_C \neq \{e\}$  なら分解を持ったが、又は  $G^d/K^d$  が Hermitian symmetric space となる場合に限られる。

以下、我々は  $(G, H)$  に次の仮定をおく：

$$(2) \quad \text{rank } G/H = \text{rank } K_{H \cap K}$$

(2) は、 $L^2(G/H, \mathbb{1})$  に discrete series が存在するための必要十分条件である事が知られている。

$$\text{例}1. (G, H) = (SO(p, q), SO(m) \times SO(p-m, q)), (SU(p, q), S(U(m) \times U(p-m, q))), (Sp(p, q), Sp(m) \times Sp(p-m, q))$$

$p \geq 2m$  の時 (但し  $SO$  なら更に  $m \geq 2$ )、上の (1) で  $H_C \neq \{e\}$ , (2) を共に満たす。

$\mathfrak{g}_0, \mathbb{R}_0, f_0 = f_{c_0} + f_{m_0} \in G, K, H = H_c \cdot H_m$  の Lie algebra と。

$\chi$  の複素化を  $\mathfrak{g}, \mathbb{R}, f = f_c + f_m$  等と表す。

$\sqrt{-1}\alpha_0$  を  $\{x \in \mathbb{R}_0 : \sigma x = -x\}$  の maximal abelian subspace とおく。

$m := Z_g(\alpha_0) = \{x \in \mathfrak{g} : [x, \alpha_0] = 0\} = \mathbb{R} \oplus Z_{f_c}(\alpha) \oplus Z_{f_m}(\alpha)$  (:(2))- $(3)$

$t_r : Z_{f_c}(\alpha)$  の Cartan subalgebra

$t^c : t := \mathbb{R} \oplus t_r$  を含む  $\mathbb{R}$  の Cartan subalgebra

$f^c : t^c$  を含む  $\mathfrak{g}$  の (fundamental) Cartan subalgebra としよう。

( $f^c$  と  $f_c$  に注意)

ルート系の (rough な) 図式:

$$\begin{array}{ccc} \Sigma(\mathbb{R}, \mathbb{R}) & \hookrightarrow & \Sigma(\mathfrak{g}, \mathbb{R}) \\ \uparrow & & \uparrow \\ \Delta(Z_g(\alpha), t_r) & \hookrightarrow & \Delta(\mathbb{R}, t^c) \hookrightarrow \Delta(\mathfrak{g}, f^c) \end{array}$$

が compatible で  $t_r$  は様に、それそれの positive system を fix する。

これが (3) より可能。(後に述べる  $G^r/\mathbb{P}^r$  の  $K^r$ -closed orbit を fix した事に対応している)。

$l := Z_g(t)$  とおく。

$\mathfrak{g}$  の parabolic subalgebra  $\mathbb{P}$ ,  $\mathfrak{q}$  を  $\alpha, t$  の generic element を用いて。

$\mathbb{P} := m + n, \mathfrak{q} := l + u$  (Levi 分解)

で定義する。但し  $f^c$  stable な nilradical  $n, u$  は。

$\Delta(n, f^c) \subset \Delta(u, f^c) \subset \Delta^+(\mathfrak{g}, f^c)$  を満たすものとする。

$\mathbb{P} > \mathfrak{q}, m > l, n < u$  である事に注意しよう。

$P, Q_f$  は  $\mathfrak{g}$  の  $\Theta$ -stable parabolic subalgebra ( $Q_0$  の imaginary polarization) である。また、 $P$  は  $G^r$  のある minimal parabolic subgroup  $P^r$  の Lie algebra の複素化となつている。

$P(m), P(m \cap K), P_m = P(\Delta^+(m))$  を対応する root の半分として定義する。

$M := Z_G(\alpha) = N_G(P), L := Z_G(t) = N_G(Q_f)$  とおくと。

これらは  $G$  の  $\Theta$  stable な連結 reductive subgroup である。

$m(\mathfrak{g}, K), m(m, M \cap K)$  etc を  $(\mathfrak{g}, K)$  (resp.  $(m, M \cap K)$ ) - module のたる Category とし、 $j$ -th cohomological parabolic induction を、 $R_p^{\pm} : m(m, M \cap K) \rightarrow m(\mathfrak{g}, K)$  と書く。但し、「 $P$ -shift」は、 $m(\alpha, \mathfrak{g})$  の trivial 表現と同一の infinitesimal character をもつ表現を  $R_p^{\pm}$  が保つ様に定義する (see Vogan [1981])。

$V^L(\mu)$  を  $\mu \in (\mathfrak{f}^c)^*$  を extremal weight とする  $L$  の有限次元既約表現とする。但し  $V^L(\mu)$  が一次元の時は  $\mathbb{C}\mu$  と書く。

$L$  の代わりに、 $G, M$  と書く時も同様の意味とする。

$Z(\mathfrak{g})$  を  $\mathfrak{g}$  の展開環  $\mathcal{O}(\mathfrak{g})$  の中心、 $D(G/H)$  を  $G/H$  上の  $G$  不变微分作用素全体とする。 $W(\mathfrak{g}, f^c), W(\mathfrak{g}, \alpha)$  を root 系  $\Delta(\mathfrak{g}, f^c)$ ,  $\Sigma(\mathfrak{g}, \alpha)$  の Weyl 群とすれば Harish-Chandra isomorphism とする。

$$Z(\mathfrak{g}) \cong S(f^c)^{W(\mathfrak{g}, f^c)}, D(G/H) \cong S(\alpha)^{W(\mathfrak{g}, \alpha)}.$$

また、 $V \in m(\mathfrak{g}, K)$  に対する  $\mathfrak{g}$  の  $(\mathfrak{g}, K)$ -module との dual  $V^V$  と書く事にする。 $V$  が有限次元の時は  $V^*$  と表す。

さて、大島-松木理論は、 $L^2(G/H, \mathbb{1})$  の discrete series の  
 $\text{Hom}_{\mathbb{C}\text{-alg}}(\mathbb{D}(G/H), \mathbb{C}) \simeq \frac{\alpha^*}{W(g, \alpha)} \subset G^r/\text{pr}$  の  $K^r$ -closed orbit(有限個)  
によって分類される事を主張している。

$\mu \in \alpha^*$  such that  $\langle \lambda, \alpha \rangle > 0$  for  $\forall \alpha \in \Delta(M, \alpha)$   
closed orbit  $K^r P^r \subset G^r/\text{pr}$

に対応する discrete series  $\mathcal{E} V_\lambda \in \mathcal{M}(g, K)$  と表す。

$$V_\lambda \simeq R_p^\wedge (\mathbb{C}_{\lambda - p(m)})^\vee \quad (s := \dim_{\mathbb{C}}(m \cap \mathbb{R}))$$

$\mathcal{E} V_\lambda \in \mathcal{M}(g, K)$  同型が  $\mathbb{D}$ -module construction & duality theorem  
([HMSW] (preprint)) から従う。(但し  $\lambda \in \alpha^*$  はある lattice の元)

$V_\lambda \neq 0$  のための十分条件として、ここで Flensted-Jensen type  
を用いよう。即ち、 $\lambda$  はある lattice に属し、かつ  $\lambda + p(m) - 2p(m \cap \mathbb{R})$   
が  $\Delta(\mathbb{R})$  dominant。この様な  $\lambda$  を fix する。(但し Theorem で  $V_\lambda \neq 0$  なら成立)

$G^r/\text{pr}$  の各  $K^r$ -open orbit  $V_i$  (有限個),  $w \in W(g, \alpha)$ ,  $s \in G^r/\text{pr}$   
に対し,  $w[s] := \overline{s P^r w^{-1} P^r} \subset G^r/\text{pr}$ ,

$$\widetilde{W}^*(s) := \{w \in W(g, \alpha) : w[s] \cap V_i \neq \emptyset\}$$

$W^*(s) := \widetilde{W}^*(s)$  の  $\not\in$  Bruhat order で minimal な元全体

$$W(s) := \bigcup W^*(s) \quad (< W(g, \alpha))$$

$W(s) \neq \emptyset$  (if  $s \neq \emptyset$ ) である。

$w \in W(K^r P^r)$  を fix する。 $\widetilde{w} \in W(g, f^c)$  と

$\widetilde{w} \sigma = \sigma \widetilde{w}$ ,  $\widetilde{w}|_{\partial r} = w$ ,  $\widetilde{w} P_m = P_m$  と 3 unique な元として  
定義する。

$(\pi, F)$  を  $G_C$  の holomorphic な有限次元既約表現で、 $H_n$  fixed vector を持つものとし。その highest weight for  $\Delta^+(g, f)$  を  $b \in (f^c)^*$  とする。

$H_n$ -fixed vector  $u (\neq 0)$  を用いて、 $F^*$  は  $G_C$  の正則関数全体のなす  $G_C$  左加群に次の様に  $G_C$  共変に埋め込まれる。

$$\begin{array}{ccc} \iota_u : F^* & \hookrightarrow & \mathcal{O}(G_C) \\ \downarrow & & \downarrow \\ v & \longmapsto & \iota_u(v) \quad (g \mapsto \langle \pi(g)u, v \rangle) \end{array}$$

$V_\lambda F^* \subset C^\infty(G)$  を、 $\{v_f : v \in V_\lambda, f \in \iota_u(F^*)\}$  が  $C$ -加群として生成する部分空間とする。(我々は、

$$V_\lambda \subset L^2(G/H) \cap A_k(G_H, M_\lambda) \hookrightarrow C^\infty(G) \text{ と見做していさ}$$

$V_\lambda F^*$  は  $(g, K) \mapsto C^\infty(G)$  (左正則表現) の admissible  $\tau_{\bar{g}}$  (9.1) submodule である。

$$V(\lambda, \Lambda) := P_{-(\lambda + \Lambda + \rho_m)}(V_\lambda F^*) \quad \text{とおく。}$$

$\tau = \tau_{\bar{g}}, \Lambda := \tilde{\omega}^{-1} b \in (f^c)^*, P_{-(\lambda + \Lambda + \rho_m)}$  は generalized  $Z(g)$ -infinitesimal character  $-(\lambda + \Lambda + \rho_m) \in (f^c)^*$  への射影作用素。

EP 5.  $V(\lambda, \Lambda)$  は Flansted-Jensen type の discrete series である。

$H_n$ -fixed vector を持つ  $G$  の有限次元表現によつて、

orbit structure が定めるある方向に、関数空間上で Zuckerman tensoring を施して得られたものである。

$\lambda_j \in (f^c)^*$  ( $j=0, 1, \dots, k$ ) を.

$$\begin{cases} \lambda_j \in \Delta(F : f^c) & (F の f^c-weight) \\ \lambda_j \text{ is dominant for } \Delta^+(m, f^c) \\ \lambda + \lambda_j + p_m \in W(g, f^c) (\lambda + \lambda + p_m) \end{cases}$$

を満たす元全体とする。但し  $\lambda_0 := \lambda$  とおく。

この時、次の定理が成り立つ。

Theorem i)  $V(\lambda, \Lambda)$  は 0でない admissible  $(g, K)$ -module,

ii)  $T|_{H_n} = id$  &  $[F^*|_H : T] \neq 0$  なる任意の  $T \in \widehat{H}$  に対し。

(この様なては必ず存在)  $H$  の有限次元 unitary 表現とする

$V(\lambda, \Lambda) \hookrightarrow C^\infty(G_H, \tau)$  なる  $(g, K)$  homomorphism

が存在する。

iii)  $\langle \lambda + \lambda_j, \alpha \rangle > 0$  for  $\lambda_j, \alpha \in \Sigma^+(g, \mathcal{O})$  ならば。ii) における任意のてに對し。

$V(\lambda, \Lambda) \hookrightarrow L^2(G_H, \tau)$  なる  $(g, K)$ -hom が存在する。

iv)  $k = 0$  ならば。  $S := \dim(U \cap \mathbb{R})$  とおく。

$$R_p^S (V^L(\lambda + \lambda - p(n)))^V \cong R_q^S (C_{\lambda + \lambda - p(n)})^V \rightarrow V(\lambda, \Lambda)$$

なる  $(g, K)$  homomorphism が存在する。

v)  $k = 0$  かつ  $\lambda + \lambda + p_m$  が  $\Delta^+(g, f^c)$  dominant ならば。

iv) の写像は同型で。  $V(\lambda, \Lambda)$  は既約  $(g, K)$ -module。

Remark 1.  $V(\lambda, \Lambda)$  の構成の基本的な idea は、大島-松木が discrete series が 0 でない条件を check する時に用いたものに基づく。

Remark 2.  $Z(g)$ -infinitesimal character が singular の時も扱っているので、 $\kappa \geq 1$  となる場合がある。1 が  $1, 1 + p_m \dots$   $\Delta^+(g, f^c)$ -strictly dominant ならば、v) の仮定の内、 $\kappa = 0$  はもう一方の仮定より従う。

尚、 $\kappa = 0$  なら、iii) の  $L^2$ -ness の仮定は critical (cf. [OM] (1984))。一方、v) の既約性のための仮定は、一般論が直ちに使える強い仮定である。§3 では、[Vogan] (preprint) と同様に、この仮定が弱められる。

Theorem i'.  $K^r$  の closed orbit on  $G^r / \text{pr}$ ,  $\lambda \in \mathcal{O}^{\ast}$ ,  $\Lambda = \tilde{w}^{-1} b \in (f^c)^{\ast}$  の動きす事によって、[Schlichtkrull] (1982) では得られていないものを含む discrete series ( $0$  でない) を構成する事ができる。  
 [Kobayashi] (1987) では、この立場でいくつかの例をえた。  
 一方、別の構成として、vector 素値の場合も、「Poisson 変換」+ Flensted-Jensen 同型 によって、[Oshima-Matsuiki] (1984) Theorem(ii) と同様の条件の下で、( $0$  になるかも知れないが)  $L^2(G_H, T)$  の discrete series が得られる。§3 の ThmA, B, C の 6) は、 $D$  に  $\mathfrak{t}$  がどうかを別の方法で決定できるので、後者の構成を用いる。

### §3 古典型の例

この節では,  $G = Sp(p, q), U(p, q), SO_0(p, q)$  の場合を扱う。

$G = Sp(p, q)$ ;  $p, q \geq 1$  の場合。

$K = Sp(p) \times Sp(q)$ .  $\theta$  を  $K$  に対応する  $G$  の Cartan involution とする。

$\mathfrak{h}^C$  を  $\mathfrak{g}$  の fundamental Cartan subalgebra とすれば,  $\mathfrak{h}^C \subset \mathfrak{l}$ .

適当な coordinate  $\{f_i; 1 \leq i \leq p+q\} \subset (\mathfrak{h}^C)^*$  とすれば,

$$\Delta(\mathfrak{g}, \mathfrak{h}^C) = \{\pm(f_i \pm f_j), 2f_l; 1 \leq i < j \leq p+q, 1 \leq l \leq p+q\}.$$

$$\Delta(\mathfrak{l}, \mathfrak{h}^C) = \{\pm(f_i \pm f_j), 2f_l; 1 \leq i < j \leq p \text{ or } p+1 \leq i < j \leq q, 1 \leq l \leq p+q\}.$$

$\{f_i\} \subset (\mathfrak{h}^C)^*$  の dual basis を  $\{H_i\} \subset \mathfrak{h}^C$  とおく。

$1 \leq r \leq p$  なる自然数  $r$  をとり, 以後 fix する。

$$t := \mathbb{C}\langle H_1, \dots, H_r \rangle \subset \mathfrak{h}^C.$$

$$\mathfrak{l} := Z_{\mathfrak{g}}(t), L := Z_G(t) \text{ とおく。}$$

$L$  は  $G$  の  $\theta$  stable 且 connected reductive subgroup である。

$\mathfrak{g}$  の nilpotent subalgebra  $u$  を。

$$\Delta(u, \mathfrak{h}^C) := \{f_i \pm f_j, 2f_l; 1 \leq i \leq r, i < j \leq p+q, 1 \leq l \leq r\} \text{ で定義する。}$$

$q := l + u$  は  $\mathfrak{g}$  の  $\theta$  stable parabolic subalgebra の Levi 分解を与える。

$$\rho := \rho(u) \in (\mathfrak{h}^C)^*$$

$$Q := p+q-r (> 0)$$

$$S := \dim_{\mathbb{C}}(u \cap \mathfrak{l}) = r(2p-r+2)$$

$$\lambda := \sum_{i=1}^r \lambda_i f_i \in \mathfrak{l}^* \hookrightarrow (\mathfrak{h}^C)^*$$

## Theorem A

0)  $\mathfrak{l}$  を Levi part とする  $\mathfrak{s}$  の任意の  $\theta$  stable parabolic subalgebra 12.

$K$  の適当な元によって、 $q = \mathfrak{l} + u$  に conjugate。

1)  $\lambda - \rho \in \mathfrak{t}^*$  が  $L$  の一次元表現に持ち上がる  $\leftrightarrow \lambda_i \in \mathbb{Z}, (1 \leq i \leq r)$  —①

以後 2)～6)において、すべて ① を仮定する。

2)  $\lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_r \geq -Q$  —② ならば、

$$\mathcal{R}_q^{S-j}(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) = 0 \quad \text{for } \forall j \neq 0.$$

3) ② の下で、

$$\mathcal{R}_q^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) \neq 0 \leftrightarrow \begin{cases} \lambda_1 > \lambda_2 > \dots > \lambda_r \geq -Q \\ \lambda_{r-2q} \geq Q+1 \end{cases} \quad \text{—③}$$

但し、③ の後半の条件は、 $r > 2q$  の時のみ課すものとする。

4) ③ における  $\mathcal{R}_q^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho})$  は  $(\mathfrak{s}, K)$  module として、pairwise inequivalent。

5) ③ かつ、 $\lambda_r > 0$  ならば、 $\mathcal{R}_q^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho})$  は irreducible as  $(\mathfrak{s}, K)$  module。

6)  $r = 2m$  ( $1 \leq m \leq [\frac{p}{2}]$ ) の時。

③ かつ  $\lambda_{r-1} + \lambda_r > 0$  ならば、

$$\mathcal{R}_q^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) \hookrightarrow L^2(Sp(p, q)/Sp(p-m, q))$$

なる discrete series への单射な  $(\mathfrak{s}, K)$  module homomorphism が存在する。

特に、 $\mathcal{R}_q^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho})$  は unitarizable。

$G = U(p, q)$ ;  $p, q \geq 1$  の場合。

$K = U(p) \times U(q)$ .  $\theta$  を  $K$  に対応する  $G$  の Cartan involution とする。

$h^C$  を  $\mathfrak{g}$  の fundamental Cartan subalgebra とすれば:  $h^C \subset \mathfrak{l}$ .

適当な coordinate  $\{f_i; 1 \leq i \leq p+q\} \subset (h^C)^*$  をとれば:

$$\Delta(\mathfrak{g}, h^C) = \{\pm(f_i - f_j); 1 \leq i < j \leq p+q\}.$$

$$\Delta(\mathfrak{l}, h^C) = \{\pm(f_i - f_j); 1 \leq i < j \leq p \text{ or } p+1 \leq i < j \leq q\}.$$

$\{f_i\} \subset (h^C)^*$  の dual basis を  $\{H_i\} \subset h^C$  とおく。

$1 \leq r+s \leq p$  なる自然数  $r, s$  (-方が0でもよい)をとり.  $f_i$  を  $\mathfrak{l}$  に固定する。

$$t := \mathbb{C}\langle H_1, \dots, H_{r+s} \rangle \subset h^C.$$

$$l := Z_{\mathfrak{g}}(t), L := Z_G(t) \text{ とおく。}$$

$L$  は  $G$  の  $\theta$  stable 且つ connected reductive subgroup である。

$\mathfrak{s}$  の nilpotent subalgebra  $u$  を次のルートによって定義する。

$$\Delta(u, h^C) := \{f_i - f_j; 1 \leq i \leq r, i < j \leq p+q\} \cup \{-f_i + f_j; r+1 \leq i \leq r+s, i < j \leq p+q\}.$$

$q := l + u$  は  $\mathfrak{g}$  の  $\theta$  stable parabolic subalgebra の Levi 分解 を与える。

$$\rho := \rho(u) \in (h^C)^*$$

$$Q := \frac{1}{2}(p+q-r-s-1) \quad (\geq 0)$$

$$S := \dim_{\mathbb{C}}(u \cap \mathfrak{l}) = \frac{1}{2}(r+s)(2p-r-s-1)$$

$$\lambda := \sum_{i=1}^{r+s} \lambda_i f_i + \frac{-r+s}{2} \sum_{i=1}^{p+q} f_i \in t^* \hookrightarrow (h^C)^*$$

Theorem B 0)  $\lambda$  を Levi part とする  $\mathfrak{g}$  の  $\theta$  stable parabolic subalgebra  $K$  conjugacy class は  $r+s+1$  個 ( $r+s$  の分割に対応する)

1)  $\lambda - \rho \in \mathfrak{t}^*$  が  $L$  の一次元表現に持ち上がる

$$\rightarrow \lambda_i \in \mathbb{Z} + Q, \quad (1 \leq i \leq r+s) \quad \text{--- } ①$$

以後 2) ~ 6) においてすべて ① を仮定する。

$$2) \quad \begin{cases} \lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \cdots \geq \lambda_r \geq \lambda_{r+s} \geq \lambda_{r+s-1} \geq \cdots \geq \lambda_{r+1} \\ r \neq 0 \text{ ならば } \lambda_r \geq -Q; \quad s \neq 0 \text{ ならば } \lambda_{r+s} \leq Q \end{cases} \quad \text{--- } ②$$

$$\Rightarrow \mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) = 0 \quad \text{for } \forall j \neq 0.$$

3) ② の下で。

$$\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) \neq 0$$

$$\rightarrow \begin{cases} \lambda_1 > \lambda_2 > \cdots > \lambda_r \geq \lambda_{r+s} > \lambda_{r+s-1} > \cdots > \lambda_{r+1} \\ \lambda_{r-q} \geq Q+1, \quad \lambda_r \geq -Q, \quad \lambda_{r+s-q} \leq -Q-1, \quad \lambda_{r+s} \leq Q \end{cases} \quad \text{--- } ③$$

但し、③ の後半は、それぞれ  $r > q, r > 0, s > q, s > 0$  の時のみ課す。

4) ③ を満たす  $\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho})$  達は  $(\mathfrak{g}, K)$  module として pairwise inequivalent,

5) ③ かつ  $\lambda_r \geq 0 \geq \lambda_{r+s}$  ならば。

$\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho})$  は irreducible as  $(\mathfrak{g}, K)$  module.

6)  $r = s$  ( $= m$  となる) の時。

③ かつ  $\lambda_r > \lambda_{r+s}$  ならば。

$$\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) \hookrightarrow L^2(U(p, q)/U(p-m, q))$$

なる discrete series への单射な  $(\mathfrak{g}, K)$  module homomorphism が存在する。

特に  $\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho})$  は unitarizable.

$G = SO_0(p, q)$ ;  $p, q \geq 1$  の場合。

$K = SO(p) \times SO(q)$ .  $\theta$  を  $K$  に対応する  $G$  の Cartan involution とする。

$\mathfrak{h}^C$  を  $\mathfrak{s}$  の fundamental CSA とし、 $\mathfrak{h}^C = (\mathfrak{h}^C \cap \mathfrak{l}) + (\mathfrak{h}^C \cap \mathfrak{p}) \equiv \mathfrak{t}^C + \mathfrak{a}^C$  とおく。

$p, q$  が odd の時、 $\dim_{\mathbb{C}} \mathfrak{a}^C = 1$ ; それ以外の時、 $\mathfrak{a}^C = 0$  である。

適当な coordinate  $\{f_i; 1 \leq i \leq p+q\} \subset (\mathfrak{h}^C)^* = (\mathfrak{t}^C)^* + (\mathfrak{a}^C)^*$  をとると

$$\Delta(\mathfrak{s}, \mathfrak{h}^C) = \{\pm(f_i \pm f_j); 1 \leq i < j \leq p+q\} \left( \cup \{\pm f_l; 1 \leq l \leq [\frac{p+q}{2}]\} \text{ (p+q:odd)} \right)$$

$$\Delta(\mathfrak{l}, \mathfrak{t}^C) = \{\pm(f_i \pm f_j); 1 \leq i < j \leq [\frac{p}{2}] \text{ or } [\frac{p+q}{2}] - [\frac{q}{2}] + 1 \leq i < j \leq [\frac{p+q}{2}]\} \cup$$

$$\left( \cup \{\pm f_l; 1 \leq l \leq [\frac{p}{2}]\} \text{ (p:odd)} \right) \cup \left( \{\pm f_l; [\frac{p+q}{2}] - [\frac{q}{2}] + 1 \leq l \leq [\frac{p+q}{2}]\} \text{ (q:odd)} \right)$$

$\{f_i\} \subset (\mathfrak{h}^C)^*$  の dual basis を  $\{H_i\} \subset \mathfrak{h}^C$  とおく。

$1 \leq r \leq [\frac{p}{2}]$  なる自然数  $r$  をとり、以後 fix する。

$$\mathfrak{t} := \mathbb{C}\langle H_1, \dots, H_r \rangle \subset \mathfrak{t}^C \quad (\subset \mathfrak{h}^C).$$

$$\mathfrak{l} := Z_{\mathfrak{s}}(\mathfrak{t}), L := Z_G(\mathfrak{t}) \text{ とおく。}$$

$L$  は  $G$  の  $\theta$  stable な connected reductive subgroup である。

$$\mu := \sum_{i=1}^r (\frac{p+q}{2} - i) f_i \in \mathfrak{t}^*, \mu' := \mu - (p+q-2r) f_r \in \mathfrak{t}^* \left( \subset (\mathfrak{t}^C)^* \subset (\mathfrak{h}^C)^* \right)$$

$\mathfrak{s}$  の nilpotent subalgebra  $u$  は

$$\Delta(u, \mathfrak{h}^C) := \{\alpha \in \Delta(\mathfrak{s}, \mathfrak{h}); \langle \alpha, \mu \rangle > 0\}, \Delta(u', \mathfrak{h}^C) := \{\alpha \in \Delta(\mathfrak{s}, \mathfrak{h}); \langle \alpha, \mu' \rangle > 0\} \text{ を定義する。}$$

$q := \mathfrak{l} + u$  (resp.  $q' := \mathfrak{l} + u'$ ) は  $\mathfrak{s}$  の  $\theta$  stable parabolic subalgebra。

$$\rho := \rho(u) \text{ (resp. } \rho' := \rho(u')) \in (\mathfrak{h}^C)^* \text{ とおく。} \rho = \mu \text{ (resp. } \rho' = \mu').$$

$$Q := \frac{p+q}{2} - r - 1 \quad (\geq -\frac{1}{2})$$

$$S := \dim_{\mathbb{C}} (u \cap \mathfrak{l}) = r(p-r-1)$$

$$\lambda := \sum_{i=1}^r \lambda_i f_i \in \mathfrak{t}^*; \lambda' := \lambda - 2\lambda_r f_r \in \mathfrak{t}^* \left( \subset (\mathfrak{h}^C)^* \right)$$

Theorem C 0) 1を Levi part とする  $\mathfrak{g}$  の任意の  $\theta$  stable parabolic subalgebra

$P \neq 2r$  の時.  $K$  の適当な元によつて  $q = l + u$  に conjugate.

$P = 2r$  の時.  $K$  の適当な元によつて  $q$  及び  $q'$  に conjugate.

1)  $\lambda - \rho \in t^*$  が  $L$  の一次元表現に持ち上がる。

$\rightarrow \lambda' - \rho' \in t^*$  が  $L$  の一次元表現に持ち上がる。

$\rightarrow \lambda_i \in \mathbb{Z} + Q, \quad (1 \leq i \leq r)$  ————— ①

以後 2) ~ 6) において、すべて ① を仮定する。

2)  $\lambda_1 \geq \lambda_2 \geq \dots \geq \lambda_r \geq \min(0, -Q)$  ————— ② ならば。

$$\mathcal{R}_q^{S-j}(C_{\lambda-\rho}) = \mathcal{R}_{q'}^{S-j}(C_{\lambda'-\rho'}) = 0 \quad \text{for } \forall j \neq 0.$$

3) ② の下で:

$$\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) = 0 \leftrightarrow \mathcal{R}_{q'}^S(C_{\lambda'-\rho'}) = 0$$

$$\rightarrow \lambda_1 > \lambda_2 > \dots > \lambda_r \geq \min(0, -Q) \quad \& \quad \lambda_{r-q} \geq Q+1 \quad -\textcircled{3}$$

但し、③ の後半の条件は  $r > q$  の時のみ課すものとする。

4) ③ を満たす  $\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho})$ ,  $\mathcal{R}_{q'}^S(C_{\lambda'-\rho'})$  間の中での  $(\mathfrak{g}, K)$  module として同型なものは。

$$p \neq 2r \text{ の時. } \mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) = \mathcal{R}_{q'}^S(C_{\lambda'-\rho'}) \quad (\forall \lambda) \text{ のみ。}$$

$p = 2r$  の時. なし。

5) ③ かつ  $\lambda_r \geq 0$  ならば。

$\mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho})$  及び  $\mathcal{R}_{q'}^S(C_{\lambda'-\rho'})$  は irreducible as  $(\mathfrak{g}, K)$  module。

6) ③ かつ  $\lambda_r > 0$  ならば:

$$p \neq 2r \text{ の時. } \mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) \hookrightarrow L^2(SO_0(p, q)/SO_0(p-r, q))$$

$$p = 2r \text{ の時. } \mathcal{R}_q^S(C_{\lambda-\rho}) \oplus \mathcal{R}_{q'}^S(C_{\lambda'-\rho'}) \hookrightarrow L^2(SO_0(p, q)/SO_0(p-r, q))$$

なる discrete series への 単射な  $(\mathfrak{g}, K)$  module homomorphism が存在する。

Remark i)  $G = \mathrm{Sp}(P, q)$ ,  $G = U(P, q)$  の場合、Theorem A, B など。

$\langle \lambda, \alpha \rangle < 0$  ( $\exists \alpha \in \Delta(U)$ ) を満たす  $\lambda$  (無限個) に対して、 $Rg^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho})$  が、reductive space  $G/H_m$  の discrete series として実現される事がわかる。(いずれも、 $Z(G)$ -infinitesimal character が singular な場合) この事は、半單純対称空間 (群自身を含む) の discrete series (rigid limit of discrete series) の場合と異なり、[Vogan](1984) の unitarizability の条件からはずれており、興味深い。

尚、対称空間  $\frac{\mathrm{Sp}(P, q)}{\mathrm{Sp}(m) \times \mathrm{Sp}(P-m, q)}, \frac{U(P, q)}{U(m) \times U(P-m, q)}, \frac{\mathrm{SO}_0(P, q)}{\mathrm{SO}(m) \times \mathrm{SO}(P-m, q)}$  の discrete series は、Theorem A, B, C の 6) の部分集合で、更に次の条件を満たす  $\lambda$  に対応する  $Rg^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho})$  達で尽される。(C では  $\lambda = m$  とおいた)

$G = \mathrm{Sp}(P, q)$  の時; Theorem A で  $\lambda_{2i-1} = \lambda_{2i} + 1$  ( $1 \leq i \leq m$ )

$G = U(P, q)$  の時; Theorem B で  $\lambda_i = \lambda_{m+i}$  ( $1 \leq i \leq m$ )

$G = \mathrm{SO}_0(P, q)$  の時; Theorem C で  $\lambda_{i+1} - \lambda_i \in \mathbb{Z} + 1$  ( $1 \leq i \leq m-1$ )

ii) 既約性, vanishing theorem for  $Rg^{S-j}$  ( $j \neq 0$ ), non vanishing of  $Rg^S$ , unitarizability については、幾つかの一般論 ([Vogan](1984), [Bien](1986) 他) から次の場合には、直ちに言える。

a)  $\langle \lambda, \alpha \rangle \geq 0$  for  $\forall \alpha \in \Delta(U)$  ならば、

( $\leftrightarrow$  Thm A, C では  $\lambda_1 \geq \dots \geq \lambda_r \geq 0$ ; Thm B では  $\lambda_1 \geq \dots \geq \lambda_r \geq 0 \geq \lambda_{r+s} \geq \dots \geq \lambda_{r+l}$ )

$$\Rightarrow \begin{cases} Rg^{S-j}(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) = 0 & (\forall j \neq 0) \\ Rg^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) \neq 0 \text{ 且は unitarizable} & (\text{cf. } \text{Thm A, B, C の 2}) \end{cases}$$

b)  $\langle \lambda + \rho_e, \alpha \rangle \geq 0 \text{ for } \alpha \in \Delta(U)$

$$\Leftrightarrow \begin{cases} \text{Thm A では } \lambda_1 \geq \dots \geq \lambda_r \geq Q \\ \text{Thm B では } \lambda_1 \geq \dots \geq \lambda_r \geq Q \text{ & } -Q \geq \lambda_{r+s} \geq \dots \geq \lambda_{r+t} \\ \text{Thm C では } \lambda_1 \geq \dots \geq \lambda_r \geq \max(0, Q) \end{cases}$$

$$\Rightarrow Rg^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) \neq 0 \text{ 又は 既約。} \quad (\text{cf. Thm A, B, C の 5})$$

(但し 1.  $D$ -module construction を用いれば、Thm B, C の  
moment map が birational, normal image を持つ case では、  
a) の仮定でも同じ結論が得出する。)

c)  $\langle \lambda + \rho_e, \alpha \rangle > 0 \text{ for } \alpha \in \Delta(U)$

$$\Rightarrow Rg^S(\mathbb{C}_{\lambda-\rho}) \neq 0 \quad (\text{cf. Thm A, B, C の 3) の十分条件})$$

iii) Theorem A, B, C の 3) の十分条件、5) は それそれ [伏島-松木]

(本報告集), [Vogan] (preprint) が対称空間の discrete series の場合に示した idea を用いる。

iv) Theorem の 2) と 6) の後半で見られる様に, vanishing theorem<sup>†</sup>

unitarizability が canonical Weyl chamber (= Remark ii) a) の条件) を少し超えた人に対しても成り立つ、といつた type の事実は、

幾つかの特別な場合に知られていく。例えば, [Enright -

Parthasarathy-Wallach-Wolf] (1985) では、「ある種の」 parabolic subalgebra (例えは Theorem A では  $r=1$  の場合に相当) からの誘導の場合を扱っている。

v)  $\mu_1 := 1 + P(U) - 2P(U \cap R)$  が  $\Delta^+(R)$ -dominant の時.

$$\left( \begin{array}{l} \Leftrightarrow \text{Theorem A では } \lambda_1 > \dots > \lambda_r \geq p - q - r + 1 \\ \text{Theorem B では } \lambda_1 > \dots > \lambda_r \geq \frac{1}{2}(p-q-r-s+1) \leq -\lambda_{r+s} \leq \dots \leq -\lambda_{r+1} \\ \text{Theorem C では } \lambda_1 > \dots > \lambda_r \geq \frac{1}{2}(p-q-2r) \end{array} \right)$$

$\mu_1$  は,  $Rg^S(C_{1-p})$  ( $\neq 0$ ) の unique  $K$ -type の highest weight となる。  
Theorem A, B, C の 6) の設定の下では,  $\mu_1$  が  $\Delta^+(R)$ -dominant という条件は, 対応する discrete series  $Rg^S(C_{1-p}) \hookrightarrow L^2(G/H_m)$

が,  $K^r$ -closed orbit に含まれる  $G/P^r$  上の measure class の境界値からの 'Poisson 変換' によって得られる事に対応する。

[Schlichtkrull] (1982) で構成された 113 discrete series は,

その type である。(但し, [Schlichtkrull] (1982) Theorem 8.2~8.4 では, 彼の構成したもののうち, Langlands parameter が安定する部分が explicit に書かれている。尚, 其の記述に若干の misprints がある。)

我々の構成した discrete series (Thm A, B, C の 6)) は,  $G = Sp(p, q)$  及び  $G = U(p, q)$  の時は常に, また  $G = SO_0(p, q)$  の時は,  $p - q - 2m \geq 3$  の場合に, Schlichtkrull のそれより 真に広い。

Schlichtkrull の構成した discrete series は、対称空間の  
 (普通の意味の) discrete series の場合 A の Flensted-Jensen type  
 に相当するが、この場合は、 $G = Sp(p, q), U(p, q), SO_0(p, q)$   
 (いずれの場合も、 $q$  が十分大きい時は (i.e.  $p-q-2m \geq 1$  (w.r.t. 2, 3)))  
 Flensted-Jensen type が対応する対称空間の full discrete series  
 になつてゐる事に注意しよう。

vi) 我々が Theorem A, B, C の 6) で述べた discrete series は、  
 discrete series 全体を尽してゐるとは言つてゐない。また、  
 重複度は、必ずしも 1 ではない。

vii) § 1 の rank condition (2) の仮定を満たさない時に  $\ell$ 、  
 $L^2(G/H, \tau)$  に有限個、あるいは  $L^2(G/H_m, \tau)$  に無限個の discrete  
 series が存在する事がある。 $H = H_m = K$  の時は、その典型的  
 な例である。あるいは Theorem A 6) の  $p = m$  の時。  
 $L^2(Sp(p, q)/Sp(q))$  には、無限個の discrete series が存在する事が  
 Blattner formula よりわかる。尚、これら type の例は、  
 砂田利一氏が提出した問題(「数学」1987 夏季号 p239)の  
 否定的反例を与える。

#### § 4 証明について

§ 2 の Theorem は,  $G/H$  の球函数の漸近挙動が, その境界値の台の言葉で表されるという大島の定理 ([Oshima] (1984)) が本質的である。尚,  $L^2$ -ness の評価は,  $P_{-(\lambda+\lambda+\rho_m)}$  を施した後で行い, 更に formal には現れる可能性のあるいくつかの exponents の可能性が否定 ([Kobayashi] (1987) §4 p28) されるので, sharp ではない。iv) の最初の等式は, Borel-Weil-Bott の定理と, induction by stages の spectral sequence から従う。

§ 3 の Theorem A, B, C について: 2) は, 壁を越えて translation した時の spectral sequence を 5) と K-type formula を用いて調べ, inductive に示す。(K-type formula を使わない別の証明も可能)。3) は vanishing theorem 2) があるのを, K-type formula (generalized Blattner formula) ([Rogalski-Zuckerman], [Vogan] (1981);  $\mathcal{D}$ -module construction ([大島 (unpublished)], [Bien] (1986) 等) が有効である。 $\Leftarrow$ ) は既に述べた様に, 小さな K-type の重複度の実際の計算が可能であるという大島の発見 ([大島-松木] (本報告集)) を使う。 $\Rightarrow$ ) は, 対称空間の場合, 幾何的な証明が大島-松木によつて与えられるのが, 二つめは, K-type formula と parabolic induction と translation principle を組み合わせて示される。

4) は, 同じ  $Z(g)$ -infinitesimal character を持つ場合が問題であるが, translation principle を小刻みに繰り返して, いつ消

えるかを調べる事でわかる。また Theorem C の 4) の後半は、  
 $K$ -type の重複度の漸近挙動によつて示される。向  $K$ -type を使わ  
ない証明も可能。即ち、 $\mathrm{SO}(P, q) \cong R_g^S(\mathbb{C}_{\lambda-e}) \oplus R_{g'}^S(\mathbb{C}_{\lambda'-e'})$   
の作用が  $S$  の仮定の下で既約である事が証明され、この場合  
の  $R_g^S(\mathbb{C}_{\lambda-e}) \neq R_{g'}^S(\mathbb{C}_{\lambda'-e'})$  が言え、一般にはこれに帰着せざる。  
5) は、[Vogan] (preprint) の方法が、もう少し広い class の  
parabolic subalgebra に対して適用可能である事を使う。即ち  
Diximier algebra の translation principle が singular infinitesimal  
character で、ある方向には望ましく行える事を、 $U(g)$  の  
ideal theory を使って示す。

### ② 最後に ...

$G/H$  は、rank condition を仮定しない一般の対称空間とする。

- $\exists \tau (\text{or } \pi_\tau) \in \widehat{H}$  (unitary 有限次元既約表現),  $L^2(G/H, \tau)$  が  
 無限個の discrete series を持つ  $\Leftrightarrow \mathrm{rank} \frac{G}{H} = \mathrm{rank} \frac{K}{H \cap K}$  か?  
 ( $\Leftarrow$  は正しく) ( $\Rightarrow$  有限個の discrete series なら反例あり).
- $M$  を  $G$  共変な  $G/H$  上の fiber bundle with compact fiber とする。  
 $L^2(M)$  に discrete series が存在する  $\Rightarrow L^2(M)$  に discrete series  
 が無限個存在する」は成り立つか?
- singular 壁から、より singular 壁に translation する時を組織的に  
 調べる ( $\tau$ -invariant に相当するもの) 事で Thm A, B, C の 3), 5) を一般化できるか?

## References

- [Bien](1986) F.Bien, Spherical D-modules and Representations of Reductive Lie Groups, Ph.D.dissertation, Massachusetts Institute of Technology, Cambridge, Massachusetts, 1986.
- [Enright-Parthasarathy-Wallach-Wolf](1985) T.J.Enright, R.Parthasarathy, N.R.Wallach, and J.A.Wolf, Unitary derived functor module with small spectrum, *Acta.Math.*, **154**(1985), 105-136.
- [Flensted-Jensen](1980) M.Flensted-Jensen, Discrete series for semisimple symmetric spaces, *Ann.Math.*, **111**(1980).253-311.
- [Hecht-Miličić-Schmid-Wolf](preprint) H.Hecht,D.Miličić,W.Schmid and J.A.Wolf, Localization and Standard modules for real semisimple Lie Groups I,(preprint).
- [Matsuki](1985) 半單純対称空間の軌道分解, *数学*(1986), 232-248
- [Oshima](1984) 球関数の漸近挙動について, ユニタリ表現論セミナー報告IV(1984)
- [Oshima-Matsuki](1984) T.Oshima,T.Matsuki,A Description of Discrete Series for Semisimple Symmetric Space, *Advanced Studies in Pure Math.*, **4**(1984), 331-390.
- [Kobayashi](1987) 対称空間上のベクトル束に実現されるユニタリ表現, *東修士論文I*, 1-56
- [Schlichtkrull](1982) H.Schlichtkrull, A series of unitary irreducible representations induced from a symmetric subgroup of a semesimple Lie group, *Invent.Math.* **68**(1982), 497-516.
- [Vogan](1981) D.Vogan, Representations of Real Reductive Lie Groups. Birkhauser, Boston-Basel-Stuttgart,(1981).
- [Vogan ](1984) D.Vogan, Unitarizability of certain series of representation of representations, *Ann.Math.*, **120**(1984).141-187.
- [Vogan](preprint) D.Vogan, Irreducibility of Discrete Series Representations for Semisimple Symmetric Spaces, (preprint), 1-46.